

## コリントの教会の告訴事件

アメリカ人の訴訟好きは有名である。日常生活のすべての出来事が訴訟の理由となり対象となる。人々は些細なことで互いに訴え合う。おかげで弁護士業は繁盛し、保険会社は莫大な保険金の支払いで四苦八苦し、皮肉なことに、そのつけが今度は被保険者である一般市民に回ってくるという具合である。悪循環である。そのような頻発する訴訟の背後には自己の権利と利益を主張する人間の飽くなき欲望がある。

分派争いの問題（1～4章）、不品行事件（5章）に続いて第6章で使徒パウロが取り扱っているコリント教会内の第3の問題は、信者同志の間で起っていた訴訟問題であった（6：1）。

パウロはこの個所で、この世の裁判や司法制度を否定しているように見えるが、事実はそうではない。彼はこの世の権威の存在とその積極的意義を認めており（ローマ13：1～7）、迫害の最中で危険が身に迫ったとき、自らその保護を受けたり（使徒言行録18：12～17）、また総督ポルキウス・フェストゥスの不当な仕打ちに抗議してローマ皇帝カイザルに上訴したりしていることからそれが分かる（使徒言行録25：11）。

パウロがここでコリントの教会のために嘆き、また彼らを叱責しているのは、神のご恩寵によってキリストのからだなる教会の一員とされている信者同志が、こともあろうに、些細な出来事（2～4節／ここで“日常の生活にかかわる争い”と訳されている原語“ビオーティコス”は、重大な罪ではなく法廷に持ち出すべきでない家で解決されるべき、日常生活の争い事を意味する語であるという）をこの世の法廷に持ち出して互いに訴え争っている事実であり、また教会の重立った人たちが、そのような出来事を教会内で処理できずに、おろかにも未信者の前にそれを持ち出すことを容認し、こうしてこの世に教会の恥をさらしているという事実である。

「そもそも、互いに訴え合うこと自体が、すでに、あなたがたの敗北なのだ」とパウロは叱責する（7節／口語訳）。他人のした些細なことで、主にある兄弟・信仰の仲間を許すことが出来ない、この世の法廷に「あえて」訴えてまで（1節ギリシャ語原文）、自分の権利を主張し、自分の名誉と利益を迫及しようとする態度、それはあまりにも軽率な、あまりにも愛の欠けた、キリスト者としてふさわしくない行動以外のなにものでもない、それはキリストの教会の中ではあってはいけないことなのだ、とパウロは言う。

教会内に起こる問題は、神からの知恵と導きを謙遜に祈り求め、キリストにある愛の精神をもって解決すべきものである、キリストのからだなる教会に加えられた者は、キリストの愛によって互いに仕え合うべきであり、互いに傷つけ合ってはならないのである、と言うのである。

教会はキリストの愛によって生きる愛と赦しの共同体であり、キリスト者の愛は、主にあって一つとされた兄弟姉妹のために「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」愛なのである、とパウロは強調する（13：7）。後で学ぶこの第1コリント第13章のパウロの言葉は、すべてのキリスト者が心に焼き付けておくべき言葉であろう。